

■第122回 み言葉の分かち合い

●第1朗読 イザヤ書8・23～9・3 (8・23の表記が異なるのは、翻訳上、章・節区切りの違いによります)

紀元前8世紀(前735年頃)北イスラエル王国(エフライム)とアラム(シリア)が同盟し、南ユダ王国(アハズ王)に侵攻します。(イザヤ7章)アハズ王(不信者)はアッシリアに支援を要請しますが、預言(イザヤ書7・16)により勝利します。敗北したエフライム(ゼブルン・ナフトリ)の地は、征服され同化させられ、靈的にも軽んじられ、闇に覆われた地に神は「大きな光を見る」との救済宣言をされ、苦しみの地が最初に神の救いを受ける「救いの出発地点」となります。イエスは、ユダヤ人からは低く見られ、異邦人と混在したガリラヤ(エフライム北部)を「宣教開始地点」として選び、神の救いは、この地から広がっていきます。暗黒の時代は続かず、最初に辱めを受けた地が神の栄光を最初に見る地となり「闇はなくなり」ます。戦争、支配、靈的無知、神からの断絶が「闇」で、神の介入、救い、希望、命が「光」です。「闇の中を歩んでいた民は大きな光を見る」とあり、イエスの宣教活動はガリラヤより開始されます。(マタイ4・12-16)救いは、慰めだけに留まらず、民は国に戻り、神殿や共同体の再建により「喜びと楽しみ」をもたらし「刈り入れ」「戦利品を分ける」喜びは、生きることへの安心感を取り戻したことを表しています。イスラエルはミディアン軍による侵攻を受けた際、神はギデオン(300名、武器は松明・角笛、士師記7・8章)を通して救いと解放をもたらし「^{くびき}輶を折られた」歴史的な事実があります。この箇所もメシア(イエス)の到来を預言する「希望の夜明け」が語られています。

●第2朗読 1コリントへの手紙1・10～13、17

パウロが第2回宣教活動中にコリントに教会を建てる。この町は国際都市で競争意識が強く、パウロが町を去った後「教会に分裂」が起こり、パウロがこの問題に取り組みます。教会の分裂要因は、人の「名・知恵」からくる派閥間(パウロ派、アポロ派、ケファ派、キリスト派)の争いで、本質的には、人を誇ることにより福音を歪めたからです。イエスの死と復活により罪の赦しと永遠の命が人類に与えられ、神と人との和解が成就した良き知らせが「福音」で、救いを生み出す力となります。受洗でイエスと結ばれた者同士は「分裂せず、心や思いを一つにして歩め」これが「主イエス・キリストの名」による勧告の内容で、自分を誇る信仰から「十字架だけを誇る信仰」に立ち返れ、と語ります。「心や思いを一つにする」とは、①個人的な評価から同じ土台に立つ。②イエスに従い、互いを裁かず尊ぶ。これらは「意見を一致させる」のではなく「十字架を中心に一致」させます。クロエ家の人(コリントもしくはエフェソ在住)より、教会での紛争がパウロに伝えられます。「キリストは幾つにも分けられた」とあるのは、救いは人からではなく、十字架のイエスのみから来る、と言っています。人の知恵や雄弁な言葉で語り手を称賛しても、悔い改めなどが起こらないのなら「十字架がむなしいものになる。」パウロは、十字架そのものでありのまま語ることこそが大切で、人の「言葉の知恵によらず」救いは神の力だと語ります。

●福音書朗読 マタイ4・12～23

この箇所は、イエスの受洗後、彼の公的な宣教活動が本格的に開始する「転換点」です。洗礼者ヨハネはヘロデ大王により投獄され、イエスは「神の時が満ちるまで、ガリラヤに退かれます。」「ゼブルンの地、ナフトリの地……ガリラヤは、栄光を受ける。」(イザヤ書9・1)と語られ、ガリラヤは「異邦人の地」で、救いの領域は限定されず、エルサレムよりも「辺境」の地と見下され、神の臨在からは遠く「闇」「死の陰の地」と、軽んじられていた場所から、神の救いは開始されます。洗礼者ヨハネと同じ言葉で、イエスも「悔い改めよ。天の国は近づいた」と語り、彼の働きを継承し、メシア到来の完成にイエスが立たれます。ペトロとアンデレは、既に洗礼者ヨハネの活動を通して、メシアの到来を待望していたところ、イエスの言葉に「権威」と「招き」を感じ取り、彼の声に従います。この姿は、過去の生き方(価値観・信念)を即断ち、神の「召し出し」に即座に応え、生活の糧を得る大切な「網を捨てた」ヤコブとヨハネも同様ですが、親や兄弟よりも「主を優先させる」ことが示されています。奇跡の数々は、神の国が到来している徵であり、神の憐れみを人に見える形にすることで「神がどのようなお方であるか」を知ることができます。

著者 蒲池 明憲